

東
山
会 会

東 山 会 関 西 支 部 便 り

平成16年(2004年)度

東
山
会 会



平成15年度支部総会写真

名古屋大学工学部機械工学科同窓会

東山会関西支部

目 次

	頁
1. 支部長就任のご挨拶	1
清水 義一（昭和31年卒）	
2. 大学の近況と東山会改革について	
名古屋大学大学院工学研究科機械工学専攻	2
機械情報システム工学専攻	
教授 酒井 康彦（昭和53年卒）	
3. 特別寄稿	
（1）最近のドイツ事情の一端とエネルギー政策雑感	3
日立造船（株） 伊藤 敏哉（昭和42年卒）	
（2）低温廃熱回収発電の実用化に向けて	6
Hitz 日立造船 清水 徹（昭和48年卒、50年修了）	
4. 会員寄稿	
（1）思い出と近況	8
川口 啓造（昭和20年卒）	
（2）生涯現役	10
大洋マシナリー（株） 荻原 稔蔵（昭和43年卒）	
（3）“停滞は退歩に等しい”	12
松下電子部品（株） 白髪 昇三（昭和52年卒）	
5. 平成15年度支部総会報告	13
企画幹事 和田 滋憲（昭和43年卒）	
6. 平成15年度東山会関西支部会計並びに監査報告	15
会計幹事 山田 晃	
会計監査 野崎 利雄	
7. 編集後記	16
8. 平成15年度 東山会関西支部役員名簿	17

1 . 支部長就任のご挨拶

支部長 清水 義一（昭和31年卒）



私事で誠に恐縮ですが、昭和31年松下電器に入社以来、大阪を離れる事なく今日に至っております。その間48年諸先輩のお導きに従い東山会関西支部活動のお手伝いをさせて頂きました。当初は、北の料亭を使った数人程度の会合だったのが、人数も増え懇親会付き総会形式となり、場所も新阪急ホテル、国鉄弥生会館、中央電気倶楽部と変遷してまいりました。名簿、会誌の発行をしたりしましたが、現在は毎年会報発行となりました。囲碁、ゴルフの同好会も加わりました。総会形式になって今年42回になるのですが、よくも毎年途切れる事なく続けられたものだと感慨深く、皆様のご理解とご協力、ご期待にお応えしなければならぬと、決意を新たにしております。

国立大学の法人化に伴い、東山会の今後の動きがどのように変わるのか解りませんが、私は関西支部代表として東山会理事に任じられていますので、状況に応じて都度皆さんにお諮りして対応していきたいと思っております。最近、若手対象会員の把握困難な上に関心も薄いのがとても残念ですが、産学官連携、全学同窓会発足と合わせて良い動きが出てくる事を期待しています。

「継続は力なり」と申しますが、新萌芽をめざして少なくとも年毎の総会と会報編集は継続させて頂くべく努力してまいります。先ず、効率化と広報改革の一環として東山会のホームページのメニューに関西支部を開設してもらいました。出来るだけホームページを通じてお知らせし、メールを使って連絡するようにしてはどうかと思っております。当然対応できない方もおられますので従来どおり郵送等も行います。可能な限りホームページにアクセス頂き、時に応じてご意見等お寄せ頂ければ幸いです。

（追記）

今回、白木前支部長より御退任に当たり、5万円の特別御厚志を頂いております。有難く拝受し、支部活動資金として活用させて頂きます。御報告申し上げますと共に衷心より御礼申し上げます。

2 . 大学の近況と東山会改革について

名古屋大学大学院工学研究科
機械情報システム工学専攻
教授 酒井康彦
(昭和53年卒)



平成14年の春と秋に工学部2号館が改修され、平成15年3月までに、工学部3号館にあった機械系事務室、図書室およびすべての関連研究室が2号館に移転いたしました。事務室については、これまで別室にあった機械系専攻(機械工学専攻および機械情報システム工学専攻)、電子機械工学専攻および航空宇宙工学専攻の3事務室が1室に統合され、4系(機械・航空系)事務室として、機械・航空工学科の学部生から上記4専攻に所属する大学院学生に至るまで、首尾一貫した教育に柔軟に対応できる体制となりました。なお、複合専攻であるマイクロシステム工学専攻の事務室は4系事務室の隣に設置されました。

全学組織関連では、平成15年4月に情報学研究科が新設され、機械・航空関連の専攻からも数名の教官が異動しました。工学研究科については、平成16年度に予定されている国立大学の法人化に合わせて、大専攻・大講座制へ移行することが決まり、現在、新教育・研究体制の整備、新カリキュラムの策定などが行われております。

本年の大きなニュースとして、文部科学省の「21世紀COE(Center of Excellence)プログラムに機械系から提案された「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス」が採択されたことがあります。プロジェクトリーダーの三矢保永教授(マイクロシステム工学専攻)を中心として、ナノテクノロジーの発展に応えるために、ナノ機械科学を探索し、マイクロナノメカトロニクス技術として融合し、高度情報社会のインフラストラクチャとなるシステム化技術を開発する世界的研究拠点を形成するべく計画が遂行されています。

さて、東山会の改革状況について報告します。現在、東山会は、会計、名簿および会報発行、事業、規則・細則等に関連した様々な問題を抱えています。特に、ここ数年来、東山会会員の同窓会に対する関心が低下しつつあり、名簿発行収入により活動している本会の会計は遠からず破綻することが懸念されています。そこで、より多くの会員の関心と支持が得られる企画と安定した財源の確保を目指し、現行の終身会費制から年会費制への移行、新たな同窓会活動の企画による参加費収入の確保、IT活用による運営業務の簡素化と情報発信の活発化が検討されて来ました。その成果の一つとして、平成14年10月24日には東山会ホームページ(<http://www.higashiyamakai.com>)が開設され、皆様への情報公開が迅速に行われるようになりました。名簿については、従来形式での名簿発行を平成16年度より中止することが理事会で決定され、その代替として、東山会のホームページから名簿データを閲覧・変更できるシステムの構築が検討されています。会報発行については、会報をPDF化し、ホームページから閲覧できる方式を採用いたしました。なお、東山会規則・細則の改正案が作成され、次回の総会(平成16年1月10日開催予定)に附議することと致しました。特に、財政改革に関して、基本金として新たに「活動支援金」を加え、会員の皆様にご協力をお願いすることとしました。

上記のように、大学および東山会を取り巻く状況は急展開しており、大変革時代が到来しているように思われます。今後とも、皆様の温かいご支援とご助言を賜りますようお願い申し上げます。

3 . 特別寄稿

(1) 最近のドイツ事情の一端と

エネルギー政策雑感

日立造船（株）

伊藤 敏哉 （昭和42年卒）



今年の夏はアテネにてのオリンピックが大いに盛り上がり、久しぶりに日本も新記録のメダルを獲得し、元気回復というところです。次なるイベントは2年後ドイツにて開催のサッカーのワールドカップであり、これに向けて世界中の熱が上がっていくであろう。

さて、私は日立造船で長く船用ディーゼルの仕事に携わってきましたが、会社生活最終ステージは陸用の発電事業、海外のエンジンメーカーとの協業・導入ワークが主となっています。先に4年前にはその1つとして「バルチラディーゼルとフィンランドのこと」を本誌に紹介させていただきました。ここ3年程は特に中型のガスエンジンの導入に注力、ドイツのエンジン会社との仕事が多くドイツ訪問も10数回を数えるようになり、いろいろな事情にもふれる機会を得ました。そこで今回は、ドイツの最新事情の一端と仕事に関係あるエネルギーや環境事情を中心にトピック的に紹介させていただきます。

まず、一般的な事柄で東西ドイツ統一前との比較で、目に付いた珍しい事情です。

2年前の6月、ドイツはマンハイム市で経験したことです。日本と韓国でのワールドカップの最中、丁度トルコが勝利を収めた日のことでした。マンハイム市は空の玄関口フランクフルトから車で約30分の人口30万くらいの都市ですが、ドイツチームが勝った時ならいざ知らず、市内の中央広場はもとよりあらゆる幹線道路が、どこから出現したのか多数のトルコの国旗をもった民衆で埋め尽くされ歓喜極まる喧騒で大変な混雑、タクシーも動けずホテルへの帰りに大いに難渋したことがあります。

聞くところには、西ドイツ時代から所謂3Kがらみの安い労働者として、多数のトルコ人が移住し、今や数百万人にもなっており、なんとトルコ人口の多い都市の中で、ベルリンは本国のイスタンブールに続いて世界で2番目の都市であるという話です。

〔この民族は、イスラム教徒であるがゆえの問題もあり、特にドイツ人が頭

を痛めているのは教育の問題で、例えばトルコ人の子供たちの中でも女性は
その習慣の違いから学校でも、ドイツ人たちと体育はもとより、同じ授業を
同じレベルで受けることは難しく、その弊害は大変なものということです。
更にはそれがまた、東独の 20%近い失業率とも言われる労働事情とも微妙に
関連し、1990 年の劇的な統一から 14 年にもなるのに東西ドイツ間のアンバ
ランス、ひいてはドイツの経済低迷の 1 つの要素になっているそうです。]

次に、エネルギー事情に関わるトピックスをいくつか紹介します。

私は、今ドイツは老舗のエンジンメーカー、ドイツ AG 社と協業し、その主
たるメニューであるガスエンジンをはじめとしたクリーンエネルギーを日本国
内で普及、拡販することに励んでおります。このドイツ AG 社は、ガス、ガソ
リンエンジンのオット-サイクルを発明した N.A.Otto が 140 年前に創業した伝
統・歴史のある会社で、小型エンジンをケルンにて、中型エンジンをマンハイ
ムにて製造し、その分野では世界的にもトップレベルのシェアを有しています。

ここのガスエンジンは、通常の LNG(日本では都市ガス)はもとより、下水処
理場から出る消化ガスや廃棄物埋立地から出るメタンガスなどの特殊ガスにも
対応できるという特徴をもっています。

今、日本ではクリーンエネルギーに向けて動き出したところで、国の施策に
しても「バイオマス日本」とか新エネルギー導入、あるいは京都会議の COP3
に端を発した CO₂の削減等の動きが、活発になってきましたが、この面でもド
イツははるかに先行しているといっても過言ではありません。有名なグリーン
ピース運動の影響もあり、原子力発電は MIN 化、それに代わって自然エネルギ
ー、クリーンエネルギーへの展開などが進んでいます。

バイオマス発電の導入も、2003 年では 51 億 kWh、総電力消費に占める割合
は 1.2%にもなっています。例えば、下水処理場は約 1300 施設あり、そのうち
の半分は消化ガス(メタンが主)を発電にも利用、すでに 17 万 kW の総発電容量
になっています。

他に、日本とは処理方法に違いがあるものの、廃棄物埋立地からのガスによ
る発電設備も約 23 万 kW も稼動しています。また、家畜糞尿等から得られるバ
イオガス発電でも約 15 万 kW に達しています。

液体燃料としては、原料に菜種を利用したバイオディーゼル油を燃料とする
施設も現状では全体に占める割合はごくわずかですが出始めております。

現在欧州の風力発電能力はドイツ、スペイン、デンマークを中心に 250 万 kW
を超え、世界の 7 割を占めていますが、その中でもドイツは群を抜き、その半
分近くの 130 万 kW の能力を誇っています。2010 年には 3 倍に拡大するとの予
測もあり、洋上型の大型発電所の新設が相次いでいる現状です。

エネルギー有効利用の面白い事例として、これはドイツよりもむしろ隣の酪農国オランダにて多く導入されていますが、例えばトマトのグリーンハウスにガスエンジン発電設備を併設、そこから出る電気は太陽代わりの照明と売電に、排気ガスと温水からの熱エネルギーはグリーンハウスの暖房に、更には排ガス中のCO₂を室内に取り込み、これにより植物の成長を20～30%促進し収穫量アップに寄与させるというまさに一石三鳥の施設も多くみられます。

〔私の見学した25万m²にも及ぶ大グリーンハウスには1000kWクラス×12台のガスエンジン設備が導入され、ここではトマトが実に1つの苗で3月から11月まで連続的に収穫されています。オランダの市場では、立派なトマトが日本の1/5～1/3の値段で出ているのを見ても、むべなるかなと驚かされた次第です。〕

他に一般的なエネルギー・環境事情として、ドイツを含む欧州ではまず電力の自由化はEU各国にまたがり、その率もすでに完全自由化なる国が数多く存在しています（英・独・スウェーデン・フィンランド・オーストリアは100%、デンマークは90%など）。

ちなみに日本では2004年でやっと500kW以上が自由化、これは35%に相当します。

電気代については、日本より格段に安いのは言うまでもありませんが、最近の石油、石炭等燃料価格の上昇、またガスも北海ガス田からの産出が急減していることもあり、今年は1-3割の高騰も予測されています。

一方、CO₂を主とする温暖化ガス削減については面白いことに、日本とは反対に欧州ではディーゼル車は善玉扱いで、この比率が平均で40%から今年には50%にも達する見通しです。これはNO_x対策事情が日本と異なっており、燃料効率を重視、CO₂の削減への寄与を第一義と考えているようです。

以上、ドイツを中心としたエネルギー事情の一端を紹介させていただきました。

(2004.8 未記)

(2) 低温廃熱回収発電の実用化にむけて

Hitz 日立造船

清水 徹 (昭和 48 年卒、50 年修了)



私は昭和 50 年に修士を出て日立造船に就職したが、当時は昭和 48 年の第一次石油ショックの後で、造船業界が巨大タンカー建造ブームから一転して造船不況へ突き進んでいったときであり、以来産業構造変革の大波に翻弄されつづけて 30 年になるうとしている。入社当時売上げの 7 割を占めていた造船部門は NKK と統合してユニバーサル造船となり、本体は環境とエネルギーが主体の会社に生まれ変わった。

私は流体力学を専攻していたので、抄紙機・シールド掘進機・マンガン団塊採鉱プロジェクト・ごみ焼却プラントの排ガス処理・脱硝装置など、プラントを中心とする種々の製品の研究に従事してきた。これらの研究開発は、会社独自で実施したものもあるが、公的機関の補助を受けた研究組合において長期間にわたって同業、異業の方々と共同研究したテーマもあり、そこで培われた技術や人とのつながりは私の大きな財産となっている。

その間、恩師の中村育雄先生のご指導を受けながら、博士論文をまとめることが出来、さらに研究室の先輩だった諸先生方のお誘いを受けて、山口大、鳥取大、名古屋大などで客員教授や非常勤講師を務めることが出来た。学生諸君には、「今自分達が学んでいることが何の役に立つのかと疑問に思うことがあるとしても、例えば流体力学の分野ひとつを見てもこれだけ幅広く適用製品があり、技術を生かす場がある。」ということを自らの経験を通じて伝えてきたつもりである。

今、エネルギーを少し幅広く見る立場になって、改めて地球環境保全や温暖化防止に向けた取り組みの重要性を認識し、これに少しでも貢献する製品を開発したいと考えている。ここでは、現在開発を進めている低温廃熱を利用した発電システムについて紹介したい。

地球温暖化問題と省エネルギー対策への関心が高まっているが、省エネセンターの資料によると、国内の工場から 200 以下の排ガスと 100 以下の温水の形態で 1 年間に約 2×10^{11} Mcal が未利用のまま排出されている。これらの低温廃熱を利用する発電装置が経済合理性に沿った形で実用化すれば、発電効率 6% としても約 1000MW の発電が可能となる。ここで純アンモニアを作動流体とするランキンサイクル発電が、低温からエネルギーを回収する有効なシステムとして期待できる。

アンモニアは、元々自然界に存在する無色透明の低沸点媒体で、大気圧では - 33.3 、 4.0MPa でも 79.6 で蒸発する。熱物性が良く、地球温暖化係数ゼロ・オゾン層破壊係数ゼロで環境負荷がほとんどない。また、特有の刺激臭の

ため漏洩時の検知が非常に容易である。フロンが冷凍機に利用される以前から冷媒として利用されており、現在でもアメリカやヨーロッパでは産業用冷凍設備の冷媒はアンモニアが主流である。環境負荷の観点から日本でも冷媒としてのアンモニアが見直されつつある。

ランキンサイクルは媒体を加熱して高圧蒸気を発生させ、これによってタービンを回し凝縮液を再び蒸発器に戻すシンプルな熱サイクルである。火力発電は基本的に水ランキンサイクルであるが、高効率を達成するために高温熱源を必要とする。これに対してアンモニアランキンサイクルは、低温熱源で容易に高圧アンモニア蒸気が得られる。水とアンモニアの混合物を媒体とするカーリーナサイクルやウエハラサイクルは、アンモニアランキンサイクルより高効率だが、構造が複雑でコストが高く、また腐食の問題もある。

本装置の適用対象は、鉄鋼、石油・化学、紙・パルプ、窯業等の各種工場やガスタービン、ガスエンジン等の原動機から排出される 200 以下の排ガスや、100 以下の温排水である。また種々のプロセス排熱にも適用可能である。これによって燃料ゼロ・CO₂ 排出ゼロの発電が可能となり、省エネルギーに大きく寄与する。通常、省エネ投資は設備回収年数が 3 年程度を目安とするところが多いが、これに対応すべくコストダウンを図ることと、システムの信頼性確立が目下の課題である。

本装置は、NEDO(新エネルギー・産業技術総合開発機構)および RITE(地球環境産業技術研究機構)の補助事業により開発を進めている。実証試験装置の出力は 25kW で、ガスタービン発電装置の排熱回収ボイラ出口廃ガス(150)を利用して、長期にわたる性能と信頼性の確認を行なっている。実用機の出力は 200kW ~ 数 MW で、1MW の出力が得られる目安は 200 の排ガスで約 45 万 Nm³/h (*)、100 の温水で約 1200t/h となる。

COP3 で採択された京都議定書に定められた日本の温室効果ガス削減目標 (2008 ~ 2012 年の年平均で 90 年比 6% 減) の達成が危ぶまれている。2002 年の実績では 90 年比 7.6% 増で、特にエネルギー起源の CO₂ が 10% を超える増加を示している。この問題を解決するために技術開発の占める役割は大きい。その一助となるよう廃熱利用による燃料ゼロ発電システムを早く製品化して、世の中に受け入れられるように努力していきたい。

(連絡先) Hitz 日立造船 (株) 技術研究所 エネルギーシステム研究室

Tel.06-6551-9472 Fax.06-6551-9906

E-mail: shimizu_to@hitachizosen.co.jp

(* : 事務局注) Nm³/h の N は Nomal の頭文字で気体を標準状態 (0 、 1 気圧) に換算した数値であることを示します。

4 . 会員寄稿

(1) 思い出と近況

川口 啓造 (昭和 2 0 年卒)



学生時代の思い出と、その後の級友とのクラス会などの近況について報告します。私の個人的な記事になりますが ご容赦ください。

旧制中学のクラス会

昭和 1 5 年に卒業した旧制中学 (姫路) 第 5 1 回生は約 2 5 0 名でしたが、戦死者 (陸士、海兵卒の将校が多い) 物故者を差引き、現在連絡のとれる生存者は約 6 0 名です。規約に基づくクラス会は 1 0 年以前に中止しましたが、その後出席希望者のみ、案内状なしのクラス会を毎月 1 回、第 2 土曜日、指定場所で開催することとし元気で出席できる傘寿を越えた友人達約 1 5 名が新しい話題を見つけて ワイワイ ガヤガヤ 雑談に花を咲かせています。内容はアルコール抜き、約 2 時間の簡易昼食会の形式で、会費は約 2 千円です。あまり例のないクラス会ですが、まだ当分の間継続できそうです。

技術系専門学校 (神戸高工) のクラス会

昭和 1 5 年入学、戦時中のことでもあり、技術系の勉強をして、重工業会社に就職し、造機関係 (兵器を含む) の仕事をする目的で機械科に入学しました。在学中の最大の思い出は昭和 1 6 年 1 2 月 8 日の日米開戦のラジオ放送を、下宿先での朝食中に聞いたことです。私達の在学期間も 2 年 6 ヶ月に短縮され繰り上げ卒業をした同級生は 7 2 名、その後、物故者、連絡のとれない級友を差引き、現在 3 5 名程度が元気らしく、殆どが阪神間に在住しています。クラス会は在学時代の思い出深い会場を選んで毎年 9 月に開催され出席者は約 2 5 名です。担当幹事は前もって 2 名を選任し必要な準備をすることになっています。

名大 4 回生のクラス会

私個人の思い出になりますが、技術専門学校からの大学進学は、戦時中のことでもあり、在学生の 1 0 % に制限され私は名大の追加募集で昭和 1 7 年

10月に入学しました。在学期間は3年間でしたが、私が授業を受けたのは1年6ヶ月、その後学生ごとに所属の変更、或は疎開先での授業もあったと思いますが、私は海軍技術学生として海軍工廠に1年3ヶ月在職してから卒業論文とりまとめのため、卒業前の3ヶ月間復学し昭和20年9月に卒業しました。復学後の3ヶ月は戦災で疎開先の生活が苦しく、8月15日には終戦の詔勅を聞き、卒業論文についても、担当教授のご指導を受ける機会が殆どなかったので心配でしたが当時の状況としてはやむを得なかったと思います。名大4回生の級友は45名、現在連絡のとれるのは24名です。クラス会は概ね名古屋周辺で開催されますが、幹事のご苦勞もあり黒部ダム、賤ヶ嶽、学士会館、恵奈峡などに出むいたこともあります。最近のクラス会では約15名が出席し特技を披露する友人に拍手を送っています。

名大卒業後の思い出

終戦直後に名大を卒業してから、戦後の混乱期のなかで約1年間転職を繰返し、昭和21年に旧制中学の卒業資格（終戦後暫く認められていました）で電力会社（関電）の地元支店に就職し、その後昭和28年に大卒の資格を認められ火力、原子力関係の業務に配置転換になりました。電力会社及び関連会社を定年退職後は自営業を開始する機会に恵まれ現在に至っております。電力会社は地域共生を目標とし在職中の所属部署のOB会が活発に活動し定期的に有意な総会が開催されていますので支障のない限り出席しています。

(2) 生涯現役

大洋マシナリー（株）
荻原稔蔵（昭和43年卒）



本年1月31日定年を迎えた。大洋マシナリー（元大洋鋳機）に37年間勤めた。大洋マシナリーは従業員200名位の鋳造機械・環境機械メーカーである。私は計画設計者として受注前の設計を担当してきた。ずっと鋳造機械の設計をしていたが、7年前から環境機械に変わり、そして道具もドラフターからCADに11年前から変わった。

鋳造機械メーカーとしては全国で2位の実績を上げていたが、海外に工場を移したり、輸入したりする鋳物工場が多くなり、新たに力を入れた環境機械への切り替えが中々軌道に乗らず、10年位前から経営的に問題が発生していた。その中でここ数年リストラを進めていた。

私もリストラ要員かなーと思っていたが、囑託として残ることになった。私の場合年金を全額貰えるのが62才からで、経済的にそれまでどうしていったらいいかという思いがあった。数年前から定年に関するセミナーを受けようとか定年に関する本を読もうとか考えていたが、実行されずに定年を迎えた。

定年前、総務の担当者が来て「囑託として雇用された場合、給料は7割になる。しかし年金の中の報酬比例部分が支給されるし、高年齢雇用継続給付も支給される」という話であった。

私は定年後に夢を抱いていた。適当に仕事をして、今まで続けていた同人誌の活動に加え、今度は合唱団に入って歌の活動もしたいと。

ところが手続きをしてみると、月の総額30数万円の壁があり年金支給額は0円、高年齢雇用継続給付は不支給となっている。話が全然違うし、国会では年金制度を改悪する謀議までしている。自分が今まで積み立ててきたのが年金であるし、失業保険の延長線が高年齢雇用継続給付だ。私は失望し、年金を当てにしない心構えが必要との気持ちを固めた。

囑託になっても仕事は現役と変わらないし、時間的にはかえって長くなっている。私は定年とは可笑しい制度だと思っている。定年制を調べていくうちに、アメリカでは1986年雇用における年齢差別禁止法が成立し、定年制が撤廃されている。それが活力のあるアメリカの源になっている。そして日本でも「定年破壊」を唱えている学者もいるし、実質的に定年制がない会社もある。又「年齢差別をなくす会」なるものまであり活発な活動をしている。今後の日本は労

働人口が減っていくし、将来的には定年制が撤廃される方向に進んでいくと思う。私は生涯現役の気持ちを固めた。

囑託になり7ヶ月が過ぎた。環境といってもわが社の得意の分野はごみ処理の機械

である。客先に行って、従業員がごみを選別しているのを見学する。従業員は年齢も性別も幅広いが叔母ちゃんが多い。そしてごみの山を見てこのごみを処理する機械は何がいいか選定する。この6年間、私達の手により幾つかのごみの中間処理施設が開業した。

昔の焼却か埋立の時代から、全てのごみをリサイクルする時代になっている。非鉄は高い金で売れるし、廃家電から貴金属を取る作業も行われている。又プラスチックや木、紙はリサイクルされたり、燃料になったり、又発電迄行われている。

最近「プロの仕事」ということを考えている。「プロの仕事」とはクレームは絶対許されない、オンリーワンの仕事であり、生涯現役とプロの仕事は裏腹だ。

友人の中には週3日 4日働き年金を貰っている者もいる。又機械加工をやっていた者が植木職人になったりしている。ダンスをやったり、畑仕事に精を出したり、定年後の働き方や趣味もいろいろだ。

生涯現役の心構えで今日も私はごみと格闘だ。作家になる夢も当分お預けだ。

(3) “ 停滞は退歩に等しい ”

松下電子部品 (株)

白髪 昇三 (昭和 52 年卒)



本年 4 月より、北陸敦賀の地で単身赴任生活を始めた。入社以来大阪の門真にて 25 年間勤務し、初めての転勤だ。業務内容は、設計開発という事で変わらないが、生活環境と健康面の環境は激変した。冬の厳しい寒さや積雪は岡山生まれの私には経験がないし、雪道の運転に至っては言語道断である。食事はどうしてもコンビニ弁当が多くなってしまっているので、野菜不足になる。さらに、門真では通勤時間が電車とバスと徒歩で 1 時間かかっていたが、車通勤で約 10 分となった今は、全く運動不足の状態である。

さて、若狭松下電器は、車載用のスイッチやセンサを開発・生産している工場の中でその中に設計開発部門が置かれている。私は現在、トヨタ自動車向けの回転角度センサの開発を行っており、特急‘しらさぎ’に乗って月 1 回は出張で名古屋を訪れる。私にとって名古屋は今も特別な街である。出張とはいえ、名古屋の地を踏むのは懐かしく幸せであるが、地下鉄で名古屋駅から豊田市まで途中下車しないで行ってしまっているので街の変化はよくわからない。きっと、栄も今池も随分変わってしまったのだろうと思う。

話は変わるが、松下電器は良い会社で、節目研修が充実している。実はこの 7 月で 50 歳を迎えた私は、チャレンジ研修を受講した。今、居場所を確保してキャリアを身につけなければ、これからの人生はますます厳しくなるという事を認識し、今から Action を起こそうという研修だ。その中に、これまでの 50 年をふり返り、自分の人格形成に大きく影響した出来事を列挙する課題があった。私はすぐに、小学校卒業の時担任の先生が一口メモに書いてくれた言葉を思い出した。“停滞は退歩に等しい”ふり返れば、私はこの言葉を座右の銘として、常に前進することを心がけてきたように思う。

若狭松下は、車載用部品を開発生産する工場であるので品質にはとても厳しい。品質向上とは、下りのエスカレータを登っていくようなもので、一瞬でも立ち止まると一気に品質は落ちるのだ。やはり前進あるのみだ。

平成 15 年度名古屋大学大学院入学式での名大総長の式辞の中に、『動機と目的を明確にし、学部の延長で大学院を考えないで』という言葉があり、“なんとなく”という答えが一番困るとのことだ。“なんとなく”は、まさに“停滞”と同義であり、変化の激しい現在の社会進歩に遅れをとってしまうことを意味している。日本の空洞化を阻止し、日本固有の技術革新に寄与できる即戦力を渴望している企業にとっては、共感できる言葉であると思う。

5 . 平成 1 5 年度東山会関西支部総会報告

幹事 和田 滋憲 (昭和 4 3 年卒)

第 4 1 回となる関西支部総会は、平成 15 年 11 月 15 日 (土) [11 時 ~ 15 時 20 分] 中央電気倶楽部で開催されました。

参加者は会員 22 名のほか名大からご来賓として大学院工学研究科の酒井康彦教授をお迎えし、以下の通り行われました。

講演会	11 時 ~ 12 時 (司会 : 清水副支部長 S 31)
総会	12 時 10 分 ~ 12 時 40 分 (同 : 青山幹事 S 32)
懇親会	12 時 50 分 ~ 15 時 20 分 (同 : 荻原幹事 S 43、和田幹事 S 43)

以下その各概要を記載します。

1 . 講演会

(1) 講演者 : 酒井 康彦氏

名古屋大学大学院工学研究科教授 機械情報システム工学専攻 (S 53 年卒)

(2) テーマ : 大学の近況と東山会改革について

(3) 講演概要

(当講演の要旨は当「関西支部便り」 2 . で酒井教授にご寄稿いただきましたので、この欄での記載は割愛いたします。)

2 . 総会

(1) 支部長挨拶 白木支部長 (S 23)

- ・ 酒井教授への講演等お礼
- ・ 支部長在任期間が長すぎるため身を引きたい
清水副支部長を後任としてお願いし積極的に応じてくれた
- ・ 関西支部との交わりは会員として今後とも継続していく

(2) 新支部長挨拶 清水新支部長 (S 31)

- ・ 東山会 (本部) が大きく変わろうとしている時期、関西支部も会計的に厳しいが努力している。本部の情報は活用させていただく
- ・ 今後ともご支援をよろしくお願いした。

(3) 新役員紹介 清水新支部長

- ・ 副支部長の紹介 青山氏 (S 32) 深谷氏 (S 34)

- ・ 今回の総会をもって新役員は承認された

[詳細は「 H 15 年度東山会関西支部便り」 P 19 参照]

(4) 東山会本部挨拶 酒井 康彦氏(名大大学院工学部工学研究科教授 S53)
〔鈴木会長代行〕

- ・ 本部では会報、名簿等の合理化に着手し、方法とシミュレーションができたばかりである
- ・ 会の規約改定を予定しているが、会の情報等ご利用いただき、それに見合ったご支援をいただきたい

(5) 会計報告 山田幹事(S33)

〔詳細は「H15年度東山会関西支部便り」P18参照〕

(6) 会計監査報告 野崎幹事(S29)

- ・ 適正な会計との監査結果報告 総会承認された

(7) 一般報告 深谷幹事(新副支部長 S34)

- ・ H15年支部役員会について
- ・ H15年度支部報について
- ・ 関西支部会員情報
住所変更状況、総会出欠葉書返信状況、死亡会員名等

3. 懇親会

- ・ 参加者全員の写真撮影
- ・ 立食形式での会食懇親会を実施
- ・ この席でゴルフ同好会(野崎幹事 S29)、囲碁同窓会(S32)の結果報告があった
- ・ 参加者スピーチ
多くの参加者からスピーチをいただいた。また、西川氏(S22)がご自慢の手品を披露され会は盛り上がった
- ・ 学生歌斉唱
- ・ 閉会の辞 佐藤副支部長

以上

6 . 平成 1 5 年度東山会関西支部会計報告

期間：平成 1 4 年 1 1 月 1 6 日より平成 1 5 年 1 1 月 1 4 日まで

収 入	金額 ￥	支 出	金額 ￥
14 年 11 月 16 日の総会会費 (9000¥×23 人)	207,000	14 年 11 月 16 日の総会費用 電機クラブ	209,920
本 部 祝 金	50,000	写 真 代	5,905
年会費 (2000¥×75 人)	150,000	通 信 費	17,385
預 金 利 息	22	総会案内制作費	66,906
		総会案内発送費	61,620
		会 議 費	24,251
		コピー、事務用品費	6,305
		旅 費 他	33,621
当年度の収入合計	407,022	当年度の支出合計	425,913
前年度からの繰越金	401,699	次年度への繰越金	382,808
合 計	808,721	合 計	808,721

以上のとおりご報告いたします。

会計幹事 山田 晃



以上の報告は適正なものと認めます。

会計監査 野崎 利雄



7 . 編集後記

支部報には関係ありませんが、アテネオリンピック期間中(8月14日～29日)は日本選手の大活躍で気持ちの良い毎日を過ごさせてもらいました。

メダル獲得数：37(第2位はロス五輪の32、金は東京の16に並ぶ)

今回は清水支部長になり初めての支部報発行です。東山会関西支部の活動が今後とも継続的かつ有意義なものになるよう、会員の皆様には一層のご協力をお願いいたします。

名古屋大学も時代の変遷とともに大きく変化しています。昨年の関西支部総会での講演を酒井教授にまとめていただきました。(2.に掲載)

特別寄稿は図らずも日立造船のお二人(伊藤敏哉さん、清水徹さん)からいただきました。エネルギー、地球温暖化は21世紀の重要問題のキーワードかと思いますが、今取り組まれていることにつきご紹介いただきました。(3.に掲載)それにしても最近の世界各地に頻発する異常気象が地球温暖化の派生事項ではないかと気になります。

会員寄稿はそれぞれの方の近況をご紹介いただきました。(4.に掲載)

- ・傘寿をこえた今でも、学生時代の級友や各種OB会に積極的に参加、交流されている川口さんには驚かされます。川口さんの若さの秘訣でしょうか。
- ・生涯現役の心がまえで定年後も従来以上の仕事に取り組まれている荻原さんには、同期生としてエールを送ります。
- ・50歳の大台に乗った白髪さんの「常に前向き」の姿勢が伝わってきました。体に気をつけ単身赴任をがんばってください。

(平成16年9月9日 W記)